

# BCS

PRIZE-WINNING WORKS

BCS賞受賞作品探訪記

28

第三四回受賞作品（一九九四年）

## 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館・丸亀市立図書館及び丸亀駅南駐輪場

後編

前編では、猪熊弦一郎氏の理想から駅前に美術館がつけられた経緯を紹介した。後編では、シンプルでおおらかな空間を実現させた施工者の努力や、現代アートを身近に感じてもらうために、美術館が行っている様々な取り組みを紹介する。

### 繊細な設計を丁寧に施工、 地下工事で工期短縮を図る

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（愛称・MIMOCA）の建設は、駅前再開発を牽引する大規模プロジェクトであり、八九年の市制九〇周年記念事業として位置づけられた。設計期間は八八年九月から約一年間。工事は八九年十二月に着工し、一年七カ月の急ぎ足で行われた。施工会社は入札により鹿島建設四国支店に決まった。現場所長に抜擢された山地満氏は、着工前に谷口吉生氏が設計した個人美術館や図書館を見学すること

からスタートしたという。「非常に難しい仕事だということを感じて、四国支店の協力会社とともに、谷口先生の要求品質をよく見ておこうと一週間ほどかけて国内各地にある先生の作品を見て回りました」。異例の見学ツアーだったと語る山地氏。「どの建物もたいへんシンプルで、品質の高い材料を使ってつくられています。精度の高い仕上がりを見て、身の引き締まる思いでした」。MIMOCAではそれを工期が短いなかで果たす努力がなされた。

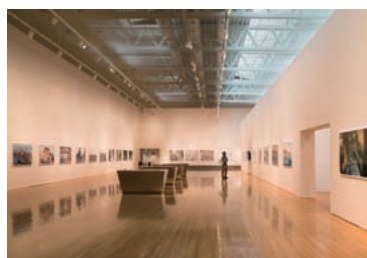
工程の進行を左右するのが地下の掘削から基礎まわりの施工にかかる段階である。土と水が相手の地下工事はやってみなければわからない要素がつきまとう。山地氏は柔軟な考えで対処した。「地下工事に関しては土木部門のほうが得意なんです。支店長に頼んで土木部門の職員に協力してもらい、SMW工法を採用したことで、地下工事のスケジュールを一カ月近く短縮できました」。丸亀駅周辺は昔は海だった地域で、水位は浅かったが、止水性の高い工法を適

2階の常設展示室B。この写真の正面の外部にゲートプラザの壁画が設置されている。天井高は約9m。上部に大きなガラスがはめ込まれ、自然光が天井を伝って展示室へ入ってくる。



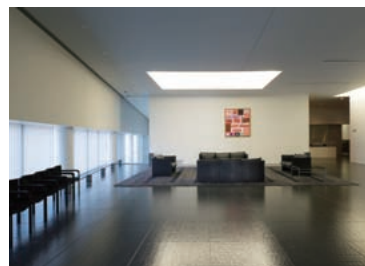


上/外装材は英国産の自然石、パーリントンスレート。本国では屋根材として使われてきた。素材感がシンプルな造形を引き立たせる。下/4階企画展示室。ルーバー天井越しに鉄骨のトラス梁が連続する様子が見える。スカイライトを設けて構造の美しさを現した。

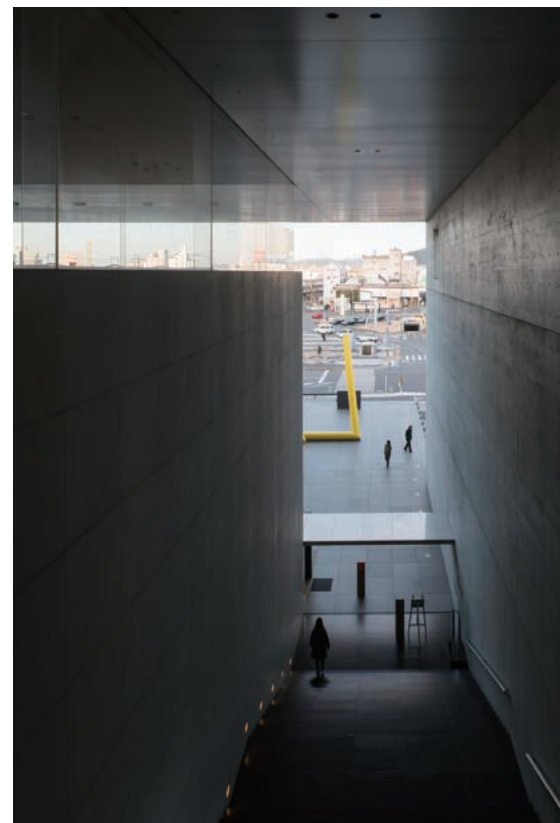


もが実感するのは、「おおらかさ」だろう。建物全体について、「都市的なスケールの建築にしかかった」と谷口氏は語る。まちの一部として、駅前広場の西側の空間をつくりだす建築には大きなスケールがふさわしい。内部もおおらかな建築空間をつくってほしいという猪熊氏の要望があった。「おおらかな建築を具体的に言うと、すべての材料を最大の大きさで使っているということですよ」と谷口氏が明かしてくれた。外装材やガラスがい

ずれも大きく割り付けられており、施工サイドにとっても初めて施工する素材であり、サイズだった。たとえば、アルミの外装材はリブを付けた押し出し型材で、最大限の一〇・五メートルの長さで使われた。「谷口先生はもつと長く建物の高さ一杯のサイズで使いたかったのです。押し出し工程ではいくらでも長尺にできるんですが、表面処理の電解一次発色を行う電気炉のサイズの限界が一〇・五メートルなんです」と山地氏。また、建物の前方の外壁にはイギリス産のパーリントンスレートを大版使いにした。本国では伝統的な屋根材として使われてきた石材で、外壁に使って支障が出ないか鹿島の技術研究所で強度試験と暴露試験を行い、「ゴースサインが出た。」ところが、メーカーから試作品を送ってもらうと、四隅の精度などがまったく出ていませんでした。それまで外壁に使われたことがなかったため、メーカーも理解できなかったようです。結局私が現地へ出かけて加工の仕方までアドバイスし、品質を確認して送らせる手配をしました」。



大階段を2階に上った先はロビー。カッシーナのソファが置かれ、誰でもくつろげる。右手にはホールや造形スタジオなどがある。



大階段から駅前広場を見通すことができる。大階段の上部は吹抜けでトップライトの光も入る。

切に使い、出水することなく地下工事を無事完了した。

### おおらかな建築のスケール感を大版の材料で表現する

美術館内へ入るエントランスは小さく、壁面と大階段の境に慎ましく設けられている。入ってすぐの一階の受付やミュージアムショ

ップのあるエントランスホールの天井は低く抑えられているが、二階の二つの常設展示室へ向かう階段の吹抜けのところで頭上が開放され、のびやかな空間に迎えられる。ちょうど外部の壁画の裏側に当たる展示室は、九メートルを超える高さのゆったりとした空間だ。生涯にわたり旺盛に描き続けた猪熊氏の絵画を、シンプルな意匠に徹した空間のなかで自由に楽しむことができる。四階の企画展示室はもつとも広く、頭上ではルーバー越しに骨組みの鉄骨トラスの梁を現し、スカイライトの光で構造美を照らし出している。

外観と、内部空間を体験して誰

### 施工者より

「やれば必ずできる」という信条が生まれました



鹿島建設株式会社 作業所所長(当時) 山地満 Mitsuhiro Yamaji

着工前に協力会社と一緒に、谷口先生が設計された土門善記念館や長野の東山魁夷館、金沢市立図書館などを見て回ったときに、必ず負けないものをつくろうと決意を固めました。現場では、谷口先生と猪熊先生が現場事務所です。

「やればできる」という言葉が私の信条になりました。後にこの美術館を私たちがしっかりとつづけたから、ニューヨーク近代美術館の増改築の設計者に先生が選ばれたと言ってくれたときは、本当にうれしく思いました。

壁画の下図の製作にも大変なエネルギーが注がれました。馬を描いた小さな作品を使用する寸法ま

で引き延ばし、体育館の床に広げて、それを猪熊先生が二階のギャラリーから見下ろし、降りてきて筆で修正されるんです。何回も繰り返して、仕上がるのに二週間ほどかかりました。谷口先生が選んだギリシャ産のホワイトタソスという白い大理石にゴムのシートを被せて線画の部分を切り取り、サンドブラストで彫り込んで、そこへ黒い人工大理石の材料を詰め固め、最後に研磨して仕上げました。

谷口先生は施工が難しいといっても妥協はされませんが、何とか粘り強く丁寧にやるほかに方法はありません。その厳しさがあればこそ、美しい空間ができていく。「やればできる」という言葉が私の信条になりました。後にこの美術館を私たちがしっかりとつづけたから、ニューヨーク近代美術館の増改築の設計者に先生が選ばれたと言ってくれたときは、本当にうれしく思いました。

### 管理・運営者より

猪熊画伯の人としての魅力も積極的に伝えていきます



丸亀市猪熊弦二郎現代美術館 館長 宮川明広 Akihito Miyagawa

昨年四月に館長に就任しました。八七年にこの美術館が計画された当時は、丸亀市役所で長原孝弘さん(元副館長・前編参照)と同じ総務部財政課に在籍し、美術館の開館準備やさまざまな調整を進めていくのを見守らせていただきました。

谷口先生を通して建築に表され、また運営面にも注ぎ込まれています。ことが大きな財産となっています。所蔵している猪熊作品はタブロークが七〇〇点。スケッチなどを含

めると二〇、〇〇〇点を超えています。常設展はタブローを中心に年四回ほどテーマを変えて開催し、季節ごとの企画展のうち、秋を猪熊作品として全館で展開しています。これまでは時代ごとや、画題ごと、色、形など、作品中心に紹介してきましたが、今後はさらに市民の方々に身近に感じていただくために、猪熊画伯のエピソードや、人物としての魅力、絵画に対する情熱なども積極的に発信していきたいと考えています。

猪熊画伯は美術館でアートを身近に感じ、日々の暮らしのエネルギーにしてほしいと考えておいででした。「美術館は心の病院」という言葉も残されています。今年の秋の企画展は丸亀市合併一〇周年記念事業の一つとして、新たに画集を製作し、市内の教育や福祉、医療施設などに配り、画伯の魅力に触れていただくように取り組んでいます。

極めて高い透明度を求めてアメリカ製のガラスが採用され、ゲート前面の壁画上部と、三階の渡り廊下に使われた。いずれもまちを見晴らすことができる場所だ。厚さが一九ミリ、長辺が五メートルで、国内では初めての採用だったという。「天井際にはめ込むので、普通に吊り込む方法ではクレーンが天井に当たって取り付けられないんです。ガラス会社と谷口先生の事務所での検討会を開き、大型の吸盤を製作してクレーンの先に着けてはめ込むことにしました」。

### コンクリート壁の色を統一し 美しい肌仕上げ

打ち放しコンクリートの壁を美



美術館の1階に丸亀市立中央図書館が併設されている。出入口は南側の道路に面する。猪熊氏の馬の絵を取り入れ、家具の色も猪熊氏のコーディネート。駅に近く入りやすいので多くの利用者がある。

しく仕上げることも大きな課題だった。「コンクリートの打設は一発勝負なのでミスは許されません」と山地氏。打継ぎをするたびに色のバラつきが出ないように、生コン会社に美術館専用の材料置き場を指定し、セメント、砂利と砂に毎回同じものを使って同じ色が出るように工夫した。さらに密で平滑な壁に仕上げるために打設しやすい高さを検討し、二・七メートルの高さでひたすら丁寧に打設作業を行った。

内部のボードなどの壁面も極めて大きく、床・天井に突き合わせるデザインで、継ぎ目を押さえる巾木や廻縁を用いない。ラインを歪ませることなく、あくまでもまっすぐに仕上げるためには、壁面を平滑に仕上げるのが不可欠となる。施工スタッフを元気づけながら、高いハードルを越えた。「猪熊先生がにこにこしながら、作品を壁に掛ける位置を細かく指示されていました。あの子の先生の笑顔には感激しました」。竣工したときの忘れられないシーンだという。

### 現代アートと 建築を楽しむ場へ

「絵画作品をご存じなくても、三越百貨店の包装紙のデザインは猪熊画伯ですと言くと、大勢の方が知っておられます。それが絵に興味をもたれるきっかけになることもあります」。宮川明広館長が展示室にゆったりと配置された作品を順に解説してくれた。MIMOCAでは展覧会の見どころを担当学芸員が解説するキュレーターズ・トーク、市内へ出かけて語る出張講座を設けるなど、現代アートはなじみにくいというイメージから、楽しめるものへと少しずつ変えていく試みがなされている。



1階のエントランスホールから階段を介して展示室が展開する。2階の常設展示室AとBをつなぐ廊下から、各フロアごとの特徴を見渡すことができる。

また、猪熊氏の理想の美術館の柱の一つとして、子供たちにいいものに触れさせ、感性豊かに育てるといふ方針があり、開館当時からワークショップが続けられてきた。古野華奈子学芸員は開館後に生まれた子供たちの反応も楽しみだという。「幼稚園や小学校で来たことのある子は、次に来たときは絵に見入って帰っていくんです。前にもこの美術館にきましたと言いに来ると、高校を出てまちを離れても帰郷したときに訪ねてきたり、以前とは少し変わってきたのを感じます」。美術館と一緒に育った子供たちにとって、MIMOCAがごく自然に日常の喜びを見出す場所となるのが期待される。